

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20830034

研究課題名（和文） 対人恐怖と自己愛の相互関係モデルに関する基礎的研究

研究課題名（英文） The basic research of two-dimension model in social phobic tendency and narcissistic personality

研究代表者

清水 健司（SHIMIZU KENJI）

信州大学・人文学部・講師

研究者番号：60508282

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、対人恐怖心性と自己愛傾向を直交 2 軸とした相互関係モデルに関する知見を深めることである。その結果、恥意識と自己愛が共に強い誇大・過敏特性両向型は、強迫的な構えを特徴としており、不安定な自己像を隠蔽するために“他者からの賞賛への依存”、“一方的な他者存在の軽視”を行い、強い怒り感情を内在させていることが示唆された。一方、自己愛は弱い恥意識が強い過敏特性優位型は、回避的な構えを特徴としており、自己を受容できないことから否定的な自己概念を持ち続け、強い怒り感情を内在させていることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：In present study, we sought to gain more insight into the basic findings of two-dimension model in social phobic tendency and narcissistic personality. Consequently, high-shame and high-narcissism type showed obsessive setting, unstable self-image, dependence of admiration from others, disregarding for others and higher anger emotion. High-shame and low-narcissism type showed avoidant setting, no acceptance of self, negative self-concept and higher anger emotion.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,360,000	408,000	1,768,000
2009 年度	1,180,000	354,000	1,534,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,540,000	762,000	3,302,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学，臨床心理学

キーワード：対人恐怖，社会恐怖，自己愛，青年期，強迫傾向，森田療法

## 1. 研究開始当初の背景

“対人恐怖”とは、他者評価に対して過剰なまでに敏感であるため、対人関係における不全感を感じやすくなる特徴を持つ。また、“自己愛”とは、自己の肯定的評価を維持し

たい欲求のことであり、誇大的な意味を含んだ自分自身に対する強い自信意識を指している。

この両概念は「他者評価に敏感な個人は、自己に対して自信を持ちにくい」との単純な

相反特性を示すものとして片付けられかねない。しかし、臨床的観点における両概念の捉え方は、決してこのような単純なものではない。かつて森田(1953)は対人恐怖を「恥ずかしがることをもって、ふがいなしとする」と表現した。これは、自己の羞恥感情を受容できない背景要因として、誇大的な自己愛の存在を想定した点にて画期的な視点を含んでいる。しかし、この対人恐怖に対応した海外の疾病概念である“社会恐怖(Social Phobia)”は、「見過ごされてきた不安障害(Liebowitz, 1985)」と称されるように、本邦ほどの強い注目を浴びた経緯を持たない上に、自己愛との関連性から検討された研究報告はほぼ皆無に等しい。

もちろん、自己愛のみを主題とする研究には、Raskin&Hall(1979)のNPI(自己愛尺度)作成を皮切りに、自己愛を誇大性と過敏性の2側面から捉えたWink(1991)の研究は急速な発展を見せている。しかし、本邦では対人恐怖と自己愛の関連性を指摘する臨床報告が豊富であるにも関わらず、国内外ともに、これに適切に対応する実証研究は稀少である。そのため、森田(1953)が指摘した、恥意識と自己愛を併せ持つタイプへの直接的言及には、大きな遅れを招く結果となってしまった。

そこで、清水他(2007)は、対人恐怖心性・自己愛傾向2次元モデルを作成し、2軸得点の高低から5類型を想定した。これによって、自己愛と対人恐怖を併せ持つ臨床タイプへの言及が可能となり、各類型に対して詳細な分析を加えることによって、一般青年への精神的健康維持の方略策定に加え、該当する臨床群への治療的示唆が期待されることになった。

これまでの研究報告によると、恥意識と自己愛が強い類型である、「誇大・過敏特性両向型」では、自意識過剰・基本的信頼感の欠如・完全主義傾向を持つことが示唆されている。また、自己愛は弱いが恥意識が強い類型である、「過敏特性優位型」では、内向性・強い公的自意識を持つことが示唆されている。この対人恐怖心性の強さを共通項に持つ両類型には、既に顕著な精神的健康の低さや適応性の低さを持つことが知られているため、これらの不適応観に影響を及ぼす諸要因への解明が、本研究の重要な課題となる。

## 2. 研究の目的

清水他(2007)による対人恐怖心性・自己愛傾向2次元モデルから抽出される5類型について臨床応用に向けた重要な基礎知見の蓄積が本研究の目的である。

そのため、各類型において、自己概念のあり方を明確に把握することや自己に内在する攻撃性(怒り感情)のあり方を把握するこ

とが求められる。

また、質問紙調査による顕在的指標だけではなく、潜在的指標である投影法によるデータの収集によって、総合的な分析を実施し、各類型のあり方を詳細に検討する。これらの分析から得られた知見によって、特に誇大・過敏特性両向型と過敏特性優位型の両類型に対する臨床的な介入視点にも言及が期待される。

## 3. 研究の方法

### (1)5類型における自尊心維持要因の明確化と攻撃性に関する検討

無関心型自己愛者は「自分は、他者から自己価値を認められて当然である」と自己を高揚的に捉えており、一方の過敏型自己愛者は「自己を信頼することができないため、他者からの賞賛を頼みにして有能感を保ち続けたい」と一方的な他者評価への依存性を期待しながら自己を捉えていると指摘される(Roninngstam, 1998)。

このように、前者には傲慢な押し付けがましさが見られ、後者には他者存在を操作することを前提とした潜在的な傲慢さが見受けられる。これは、各々が異なる自尊感情の維持方略を持つ可能性を示唆する知見である。従って、2次元モデルにおいて前者に対応する誇大特性優位型と、後者に対応する誇大・過敏特性両向型では自尊心維持に異なる方向性と自我強度の相違が推定される。

自尊心は、Well-Beingの促進要因(伊藤・小玉, 2005)であり、個人の日常的な肯定的感情の形成・精神的健康維持に大きく影響するため、その源泉となる要因探索には大きな臨床的意義を有する。また、自尊心の安定性は、“自己愛的憤怒”と呼ばれる特有の怒り感情の表出にも影響する。怒り感情表出には特有の自己防衛機能が作用しており、現実の対人関係にも大きな影響を及ぼすものと推測される。

### 方法

清水他(2008)のTSNS-S尺度によって類型判別を行い、各類型で自尊心(Rosenberg, 1965)と、自己生産的な本来感、他者依存的な随伴性自尊感情、他者軽視的な仮想的有能感、自己像の不安定性のあり方を比較する。

加えて自尊心の安定性に関連する攻撃性には、社会的望ましさの影響を受けにくい敵意感(渡辺, 2001)を選定し、各類型において比較検討を行う。

### (2)5類型の潜在的指標(投影法)とこれまでの顕在的指標との整合性の検討

過敏型自己愛は、対人恐怖と自己愛を重複

するものであると考えられ、その多面性ゆえに顕在的指標のみによる言及には限界がある (Wink, 1991) とされている。また、背後に自己愛の傷つきを持つ対人恐怖タイプ (鍋田, 1997) にも、同様に潜在的側面への検討が必要であると指摘されている。

そのため、実際の意識上の顕在的指標 (質問紙調査) と意識的な統制を受けにくい潜在的指標 (投影法検査) との整合性の検討が必要となる。従って、2次元モデルのアナログ類型における顕在的指標と潜在的指標の共通性および独自性の明確化を行う。また、通常の臨床場面にて心理アセスメントを行う場合は、質問紙と投影法による多面的なテストバッテリーが組み込まれる現状から考えても、各類型における両水準指標のバランスに関する知見には臨床応用におけるアセスメント解釈にも重要な特徴的資料が提示される。

#### 方法

清水他 (2008) の TSNS-S 尺度によって類型判別を行い、各類型における投影法検査 (バウムテスト・P-F スタディ・SCT) から得られる潜在的指標が、これまでの質問紙調査から得られた顕在指標による実証的知見と、どのような対応を見せるのかについて基礎的観点から検討を行う。

#### 4. 研究成果

本研究の結果より、恥意識と自己愛が共に強い類型である「誇大-過敏特性両向型」では、強迫的な構えを特徴としていることが示唆された。また、本類型の自己概念のあり方としては、不安定な自己像への対処に苦慮する中で、他者からの賞賛を敏感に求める特性と他者を軽視することで自己の有能感を高めようとする特性によって自尊心の維持を図っている様相が示唆された。そして、容易に敵意感が生起されやすい上に、怒り感情の解消にも困難を持つ可能性も示されていた。これは、本類型が脆弱な自己概念を持つ現状を隠蔽するために、実際の対人関係における操作から肯定的感情の源泉を獲得しようとしていることが考えられる。ただし、怒り感情が持続的に内在していることを考えると、このような対処が適切に機能しているとはいえないことも一考されるべきだと思われる。

一方、自己愛は弱いが恥意識が高い「過敏特性優位型」では、回避的な構えを特徴としていることが示唆された。また、本類型の自己概念のあり方としては、自己をありのままに受容できないために否定的な自己像を持ち続ける結果を招いており、低い自尊心を維持せざるを得ない様相が示唆された。そして、怒り感情も生起しやすく、適切に解消されて

いない可能性も示されていた。これは、本類型が脆弱な自己概念を変容させるために何らかの戦略的な対処方略を用いているわけではなく、現状に背を向ける形で肯定的感情から遠ざかっていることが考えられる。ただし、怒り感情が持続的に内在していることを考えると、否定的な自己概念を持つことに対して強い不満足感を持っており、このような対処が適切に機能しているとは言えないことが示された。

そして、投影法による潜在的指標 (バウムテスト・P-F スタディ・SCT) と、これまでの質問紙による顕在的指標の対応性については、一致する部分と不一致であった部分が混在しており、現時点では一定の結論を導くのは困難であると判断された。これは、潜在的指標における分析視点の細分化が更に必要になると考えられたため、今後課題を残す結果となった。

本研究は、森田 (1953) が指摘した対人恐怖と DSM 基準が示す社会恐怖における相違の一端に触れるものである点において、重要な位置づけを有している。これまで、対人恐怖と社会恐怖の相違に関する見解には様々な立場があり、一貫した結論は未だに得られていない。その中で、本研究は両者の自己概念のあり方と対処方略に一定の差異を見出している。これらは、実際の臨床的介入や予防的介入に対する大きな示唆を提示するものであり、自己概念や対処方略の相違に応じて、援助的視点を柔軟に変容させる必要性について論ずるものである。

今後においても、対人恐怖心性と自己愛傾向を相互関係モデルにて捉えた本枠組みを利用しながら、効果的な介入視点に関連する実証的知見を補完することが必要になってくるものと思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 清水健司・岡村寿代, … (対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける認知特性の検討 -対人恐怖と社会恐怖の異同を通して-) …, 教育心理学研究, 58 巻, 23-33, 2010, 査読有
- ② 清水健司・岡村寿代・川邊浩史, … (対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける心理的ストレス過程) …, 人文科学論集 人間情報学科編, 44 号, 75-84, 2010, 査読無
- ③ 清水健司, … (青年期における対人恐怖心性と自己関係づけの関連) …, 人文科学論集

人間情報学科編, 43号, 65-75, 2009, 査読無

④清水健司・川邊浩史・海塚敏郎, … (対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける自我同一性の様相) …, 心理臨床学研究, 26巻 97-103, 2008, 査読有

⑤清水健司・川邊浩史・海塚敏郎, … (青年期における対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連) …, パーソナリティ研究, 16巻, 350-362, 2008, 査読有

〔学会発表〕 (計 5 件)

①清水健司・岡村寿代, … (ネガティブな反すうの増減要因に関する検討) …, 第 51 回大会日本教育心理学会, 2009. 9. 20, 静岡

②岡村寿代・清水健司, … (中学生の対人恐怖心性とストレス反応の関連) …, 第 51 回大会日本教育心理学会, 2009. 9. 20, 静岡

③清水健司・岡村寿代・川邊浩史, … (ネガティブな反すうの統制不可能性に関する一考察) …, 第 73 回大会日本心理学会, 2009. 8. 27, 京都

④岡村寿代・清水健司, … (中学生の対人恐怖心性と不合理な信念の関連) …, 第 73 回大会日本心理学会大会, 2009. 8. 26, 京都

⑤清水健司, … (対人恐怖心性における素因ストレスモデルの検討) …, 第 72 回大会日本心理学会大会, 2008. 9. 20, 北海道

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

清水 健司 (SHIMIZU KENJI)

信州大学・人文学部・講師

研究者番号：60508282